企画展

刀剣の研磨

～千年の輝きの秘密～

●主催　福井市立郷土歴史博物館
●共催　公益財団法人日本美術刀剣保存協会福井県支部
●会場　2階　企画展示室
●会期　平成24年9月7日（金）～9月30日（日）

江戸時代の古い研ぎがのこる刀
（雲重脇指：越葵文庫）

刀剣の研磨の歴史

刀の研磨の歴史は古墳時代にまでさかのぼります。高知県高岡郡日高村に鎮座する小村神社の御神体「金銅荘環頭大刀」（国宝）は7世紀前半の作とされ、刀身には砥石にあてて研いだ砥目が残っています。また平安時代中期成立の『延喜式』巻四十九には刀の工程として「麁砥磨」「精磨」「瑩」といった記述が見え、現在とは同一でないものの、刀を美しく見せるための研磨の方法がすでに存在したことを物語っています。

現存しない鎌倉時代の数種の刀剣書を集録し、室町時代に成立した最古の刀剣書『観智院本銘尽』には、列挙された後鳥羽上皇の御番鍛冶の名とともに「御太刀磨」という職方の名が見え、専業の研師の存在がうかがえます。

室町時代から将軍家など時の権力者に仕えた本阿弥家は、刀剣の研磨・手入れ・鑑定を家業としており、伝によれば慶長の頃（1596～1614）には「拭い」（裏面参照）の手法を確立したといい、これがいわゆる差し込み研ぎの原型となったようです。

幕末には「鉄肌拭い」と「後刃取り」という、現在の化粧研ぎの原型となる手法が生まれ、明治期に本阿弥彌十郎成重がこれを洗練して、現在主流となっている化粧研ぎの工程を確立しました。これは刀の地刃の見どころを最大限に表そうとし、刃取りに研師自身の創造性を発揮する点に特徴があります。すなわち刀剣の主たる価値を、それまでの「武器」から「美術品」としてのそれに大きく転換しようとするものでした。

刀の誕生、あるいは再生

日本刀は、刀鍛冶の手によって生み出されるものですが、その段階では完全な姿ではありません。刀鍛冶は多くの場合、「鍛冶押し」という荒研ぎを施して刀の姿を一応整えた状態で、後の研磨の工程を研師に委ねます。研師はそれを受けて、刀鍛冶の意図を正確に読み取り、刀に合わせて砥石を選び、工程を重ねながら、肉置き（刀の断面の形状）、棟や鎬筋といった形の要素を決め、地鉄や刃文の美しさを表していきます。地や刃に現れる微妙な変化は、仕上げ研ぎの段階ではじめてあらわとなるもので、これらの美しさを最大限に引き出すことが求められます。そこには研師の経験や技術のみならず、絵画的センスや創意工夫が不可欠です。

研磨はまた、傷や錆などによって本来の美しさを失ってしまった刀の再生の作業でもあります。長年の手入れで地刃の境が判然としなくなり鑑賞できないものや、特に錆のある刀は放置すると侵食が進み、致命的な傷となることもあるため、古名刀であっても状態によって新たな研磨が必要となることも多いのです。そのような場合、研師はいかに美しく見せるかだけでなく、いかにその美しさを長く残せるか、ということも考慮に入れながら研磨の作業を進めます。

平成16年福井豪雨で水没し錆に
覆われた刀の研磨前と後の状態

研磨の工程(概略)

下地研ぎ

刀剣の姿や形を整える基本的な仕事で、数種類の砥石が用いられます。それらの砥石を目の粗い順で並べるとおおむね次のようになります。

下地研ぎの様子

金剛砥（人造砥。＃200）　深めの錆をとったり、大きく形を直すのに使います。

伊予砥（愛媛県松山産。＃400）
備水砥（熊本県天草地方産。＃400）　錆を落としたり、形を整えます。

常見寺砥（福井産。＃600？）（浄教寺砥）　一乗谷朝倉氏遺跡の奥、浄教寺に産し、江戸時代に盛んに用いられた砥石。現在は採掘されていない。伊予砥よりもやや目が細かい砥石で、「最良の研師は荒砥も伊予砥も用いず常見寺砥で研ぎ始める」と記した書もあるといいます。

改正名倉砥（山形県産。＃600）　伊予砥（備水砥）での砥石目を消したり、薄錆をとったり、微妙な整形に用います。

細名倉砥（愛知県産。＃1500～2000）　砥石目をさらに細かくしていきます。

内曇砥（京都府産。＃4000～6000）　全く砥石目がなくなるようにします。この段階で刃文や地肌の特徴が現れてきます。

仕上げ研ぎ

仕上げ研ぎの工程は下地研ぎで表れ出た地鉄をより細やかに美しくし、美術品として完成させることを目的とします。当てる砥石は換えても作業の動作や道具は変わらなかった下地研ぎとは対照的に、工程によって様々な道具を使用します。

刃艶・地艶

刃艶砥は良質の内曇砥を薄く小さく削ったものの裏に吉野紙を膠や漆で裏打ちして刃文の部分を研ぐのに用います。
地艶砥は鳴滝砥（京都産）を薄く割って地の部分を研ぐのに用います。

地艶の様子

拭いの様子

拭い

刀身に光沢を与えるために行うもので、酸化鉄の粉末などを調合した「鉄肌拭い」という方法が多く行われています。これにより地刃の境がはっきりしてきます。「差し込み研ぎ」はこの後の刃取りを行わない手法で、その分ここまでの工程により吟味が必要とされます。

刃取り・磨き・ナルメ

刃取りは「刃を拾う」ともいい、刃の部分を白く美しく仕上げます。磨きは刀の鎬や棟の部分を長さ15センチほどの細い丸い鉄棒で磨き上げることをいいます。鏡のような光沢が得られます。ナルメは帽子の部分を研磨して白っぽく仕上げます。平地と切先との境目を横手といいますが、この線がきれいな直線になるように研ぎ上げます。棟先と鋒元に化粧磨き（磨き棒で等間隔の直線を引く）を施すと完成です。

ナルメの様子

関連行事

【日本刀研磨実演】（見学無料）
9月15日（土）・9月17日（月・祝）両日とも13：30～15：00
当館2階　講堂にて
研師：藤川芳夫氏・藤川二朗氏
【学芸員によるギャラリートーク（展示解説）】
（参加自由　※要企画展チケット）
9月9日（日）・9月23日（日）・9月30日（日）いずれも14：00より

展示解説シート　№69
平成24年9月7日発行
福井市立郷土歴史博物館
〒910-0004　福井市宝永3-12-1
電話　0776-21-0489
Fax　0776-21-1489
担当：松村知也
印刷／㈱リンクコーポレーション
電話　0776-23-4231 FAX　0776-23-4287